

【石の俗称】

牛馬と石(その1)

加藤 碩一¹⁾・遠藤 祐二²⁾

『牛馬の如くこき使われる』とは筆者らの日常です(そんなに働いているのかなどという内輪揉めはやめましょう)。2002年は午年なので、馬だけに因んだ石の話で幕開けしようと思いましたが、馬と牛は分かちがたく、両者ともに2回にわたって取り上げることにしました。

さて、牛や馬と人間の関わりは古くまた多様でした。1万数千年前のヨーロッパの後期旧石器時代のクロマニヨン人によって、有名なスペインのアルタミラ洞窟の壁画には野性の牛(これはバイソンです)や馬の狩りの様子が描かれています。また、フランスのラスコー洞窟には家畜牛の祖先型である原牛の絵が描かれていることは有名です。これらは捏造ではないでしょう。古く中国の秦の遺跡から出土した無数の兵馬俑にも馬をかたどったものがあり、時代が下って8世紀初頭の唐の時代の焼物である唐三彩にも駱駝と並んで馬をかたどったものが数多くあります。中東でも牛は重用されていました。例えば、コブ牛はゼブウ牛とも呼ばれ、ヨーロッパ家畜牛とは起源を異にしています。コブの後方に位置する胸椎の棘突起がヨーロッパ産の牛と異なって二つに分岐していることから明らかです。このコブ牛は紀元前2500-1500年に遡るインダス文明を代表し、写真1に示すようなオニキス製の彫刻やその他コブウシを描いた出土品(印章など)がモヘンジョ・ダロやハラッパーなどで発掘されています。また、ほぼ同時代のイラク南部の古代バビロニアのシュメールなどからも出土しており、後述するように他の文明圏でも同様です。また、東西文化の融合もみられます。たとえば、18世紀到北京の宮廷内にあるアトリエではイタリアのミラノ出身の

画家ジュゼッペ・カステリオーネと中国人画家達とが共同して両者の画法を合体して独特の「百駿図」つまり百頭の馬の絵を描いています(田中, 2000)。これらの馬は1つとして同じものはないという凝りようです(現在は台北の故宮博物館蔵)。

これだけ長く人間に馴染みが深いと、これを受けて石や化石の世界にも馬や牛にちなんだものが多々あります。例によって蘊蓄というか知ったかぶりというか、しばしお付き合いの程を。こんな話はそれこそ風馬牛だという方はどうぞ飛ばしてお読み下さい。

1. ありえないもの・得体の知れないもの

まずは牛馬に関するおかしな話から始めましょう。

ありえないことの例えとして『烏頭白くして馬角を生ず』という言い回しがあります。その奇跡的なことが起こったという故事が中国の有名な古典の1



写真1 インダス文明を象徴するコブ牛の彫刻(オニキス製、複製品)。

1) 産総研 地球科学情報研究部門
2) 産総研 地質標本館

キーワード: 牛, 馬, 牛石(岩), 石の俗称

つである史記刺客伝にあります。秦に捕虜となっていた燕の太子丹が、秦王から烏の頭が白くなり、馬に角が生えたら解放してやろうといわれ、その不可能さを嘆いていたら実際にそのような事例が生じ帰国できたといえます。

さて、ものの本によりますと沖縄には「馬の角」があるそうです。これは久米島西の島尻郡具志川村竹内字具志川の浜川家に200年前から伝わる家宝で、先祖の浜川昌述が道路開削への貢献や飢饉時に村人に米を配るなどの功績によって当時の琉球王朝の尚敬王(1713～1751)から贈られたもののだといえます。以来、沖縄ではこの世に2つとない珍しいものを「馬の角」というそうです(斎藤, 1979)。いつか見てみたいものです。

「馬の角」といえば、西洋の妖精伝説には一角獣(ユニコーン)が登場します。いわば角のある馬です。パリのクリュニー美術館所蔵のタペストリー「貴婦人と一角獣」は有名です。やや照明を落とした展示室の壁に飾られた大きなタペストリーの深い真紅の地色の上に、精緻にかつファンタスティックに織り込まれた図柄は一見の価値があります。6帳あり、そのうち5つは人間の五感「視覚」「聴覚」「味覚」「臭覚」「触覚」を寓意していると言われていいます。残りの1つは何を暗示しているのかは議論が絶えないところですが。

さて、近頃トルコ・台湾・インドを始め世界中で被害地震が多発しており、多くの人々が危惧の念を禁じえません。地震予知は夢のまた夢なのでしょう。地震の原因は、わが国では地震虫とか鯨とかいわれていますが、ペルシャ神話では、大地は牛の角の一本の上に乗っていると言い伝えられています。牛は疲れると頭を揺さぶって大地をもう一本の角へ移しかえます。これが地震の原因だそうです(岡田・奥西訳註, 1999)。21世紀はあまり牛が疲れないことを祈るばかりです。

まあ、角ぐらいで驚いてはいけません。なんと沖縄県竹富島の喜宝院には「牛の卵」があるということです(斎藤, 1979)。一体何なのでしょう。子供の謎々に「鼠の卵は何色か」というのがあり、うっかり「鼠色だ」と答えると「鼠には卵はないよ」と馬鹿にされるということがあります。鼠も牛も哺乳類ですから卵が有りえようはずありませんが、一回見てみたいものです。

この他にも馬と牛はいろいろはりっています。馬に翼がはえた天馬というのは、たとえばギリシャ神話に登場するペガサスが有名で、星座にもなっていますが、牛にも翼があってもよいでしょう、というわけかどうか知りませんが、紀元前721～705年のアッシリアのサルゴン2世の宮殿壁を飾っていたという有翼人面の雄牛像は有名です。高さ5mに達する雪花石膏(アラバスター)製の巨大な彫刻で、現在はパリのルーブル博物館に所蔵されています。

『馬の骨』というのは「得体のしれないものたといえ」で、『どこの馬の骨だ』などという台詞があります。筆者らはそんなことを人さまに言ったことはありませんが、言われたことはあります。昔中国で「竜の骨」とか「竜の歯」とよばれたものは様々な哺乳類の歯の化石です。その大部分は初期の馬のヒッパリオンや象の歯の化石です。

さて、またまた脱線すると(本文全部が脱線だという説もありますが)、藤沢周平の小説に「秘太刀馬の骨」というのがあります。もちろんフィクションですが、時は江戸時代のある藩で、筆頭家老が暗殺されます。一撃で首根を断つという必殺の技で、刀傷から「馬の骨」と称される秘太刀によるものと判明します。ではその剣を使うのはどこの誰で、また誰が命じたのか、藩の政争とからんで話は発展していくというなかなか面白い小説です。時代小説に関心のある方は御一読を。

今はあまり使われていませんが、「馬の骨」があれば当然(かどうか知りませんが)「牛の骨」もあります。江戸時代の「傾城禁短気」に『どこの牛の骨やら知れぬ女の腹からすべった餓鬼を俺に取って育てとや』という台詞があるそうです。古代中国、例えば殷代には牛の大腿骨は亀の甲と同様に文字を刻んだり、占卜の材料に用いられました。また、スープの出汁にも用いられます。そんなところの「馬の骨」は役に立たないが「牛の骨」は役に立ってきたといえましょう。もっとも今どきでは、肉骨粉となると問題ですが。

与太話めいたつかみはこれくらいにして、「馬に乗るまでは牛に乗れ」(少しでも先に進む方がよい。次善の策でもやらないよりましという意味)といえます。意味は違いますが、まず牛から本題にはいりましょう。

2. 牛の歴史

「人に歴史あり」といいますが、牛にも歴史があります。

まずは、伝説の世界から。古代ペルシャ神話においては善神アフラ・マズダーが世界創造をしたとき、空・水・地・植物について5番目に創造したのが動物で、その最初の動物が白い牡牛(原始牛)でした。しかし、悪神アハリマンによって殺されてしまいます。その精液は月に運ばれて月光で清められ、その後この精液から牡と牝の牛が生まれました。さらにそれに続いて282対の各種の動物が現れたといえます。つまりここでは牛はあらゆる動物の祖先として崇められていたのです。

インドでは牛を聖なる存在として尊崇する風習が現在でも残っています。ゾロアスター教でも牛は大切な存在でしたが、インドでは牛を殺すことはバラモンを殺すにも等しいと見なされたほどです。

中国では古くから牛は農神とみなされ、これが日本に牛神としての牛頭天王その他の牛を主神とする祭りが盛んに行われた一因ともなりました。一例を挙げれば、岡山県和気郡吉永町の牛神社があります。約300年前、英田郡から石造の雌雄一対の牛像をここに移して祭神としたものです。古来農耕の神として信仰を集めてきましたが、社殿はなく、境内の苔むした牛像が神像、備前焼の10cmほどの牛が無数に積み上げられたものが神座となっています。というのは、願を掛けた参拝者がこれを一個持ち帰り、願いがかなうと倍にしてかえすという風習によるためです。いまではその数は15万個に達するといいますが、誰がどうやって数えたのでしょうかかなどは野暮な詮索というものです。ここでまた、少し脱線すると、洪水対策のため竹や針金を細長い袋状に編んで石を詰め込み川岸に積み上げるものを蛇籠と呼びます。さらにこれを幾つか木枠に納めて、堤防と直交して置いて水勢を弱めるのに用います。これを「聖牛」と称します。木枠を結び合わせた先端部が牛の角に似ているためといいますがどうなのでしょう。

歴史的には、牛はメソポタミアやエジプト時代にすでに農耕に使役されていました。つまり紀元前5,000年以上前の古代オリエント農村生活ですでにその家畜化が始まっていた。また、かの有名な

プリニウスの『博物誌』には、エジプトでは右横腹に白い斑点があり、舌の下にカブトムシのような印がある選ばれた牛はアピスという名で聖なる牛として信仰の対象ともなっており、その動作が重要な予言として解釈されたことが紹介されています。

まあいろいろな用途に用いられたわけですが、かわったところでは、水牛がいれば火牛もいますという話です。といってもこちらは昔の戦法1つで「火牛の計」と称されます。牛の角に刃物をつけ、油に浸した葦などの束を尾に結わえ付け火をつけるのです。おもに夜戦に用いられ、中国の戦国時代の斉の軍師であった田単が始めたといわれます。牛もたまったものではありません。

わが国との関連では、『三国志』魏志東夷伝倭人の条(いわゆる魏志倭人伝)に、『邪馬台国には牛・馬・虎・豹・羊はいない』という記述があります。これが正しければ三世紀の日本には牛馬はいなかったこととなります。しかし、邪馬台国が必ずしも日本全土を指していたわけでもなく、また歴史書の記述がすべて真実というわけでもありません。弥生時代の遺跡から牛馬の骨や歯の出土が報告されている例もありますが、後世の混入とする説もあってやや疑わしいところがあります。しかし、古墳時代後期には牛は日本に確実に存在していました。日本では三世紀中頃以降アジア大陸から当時の朝鮮を経て伝来し、七～八世紀には全国的に普及していたようです。初めの頃は農耕用だけでなく肉食や乳の飲用にも用いたのですが、仏教の影響を受け、日本書紀によれば天武天皇四年(674)には、牛・馬・犬・猿・鶏の屠殺・肉食禁止がなされてしまい、その後明治天皇が自ら牛鍋を食するまで表向きには禁止されていました。『日本霊異記』などに記述される因果応報譚では、死者は罪の報いとして牛に生まれ変わって酷使されるという結末をとることが多く(断じて筆者のことではありません)、肉は食われずとも酷使されて苦しむものの代表とみなされました。

生物・古生物学的には、牛は偶蹄類(目)ウシ科に属する哺乳類の一員です。その起源ははっきりしません。漸新世(3,800万年前～2,500万年前頃)のアジアに出現したとの説もありますが、実際には中新世(約2,330万年前～約520万年前)後期まで

LES VACHES / COWS

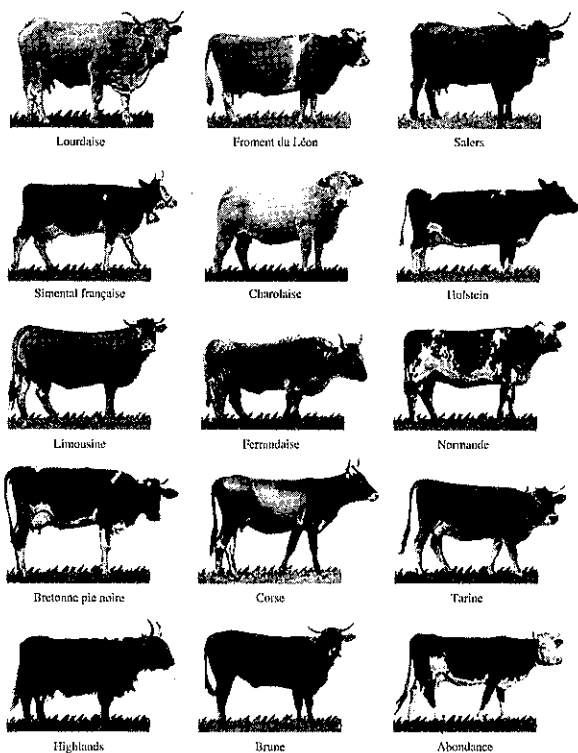


写真2 現生の牛の品種例。

遡ることができます。北半球から南アジアやアフリカに広がったのは次の鮮新世以降です。南米とオーストラリアには渡来しなかったため、今日両地方に分布する牛は人間が運んだ結果です。前述した旧石器人によって描かれた洞窟画にあるのは原牛ともいうアウロクス(ボス・プリミゲニウス)の仲間です。更新世及びそれ以降(170万年前以降)に棲息した巨大な牛で、そのころから狩猟の対象となっていました。1627年にその絶滅が確認されています。属名のボス(Bos)は、ラテン語でウシのことで、親分と言う意味のbossとは異なります。現在の牛の品種は数多く(一説では約43属123種以上あるそうです(五十嵐, 1998))。パリで売られている牛の絵葉書を紹介しておきましょう(写真2)。ホルスタイン種(写真2の右列上から2番目、ドイツライン河口原産の大型乳牛)やシャロレー種(写真2の中列上から2番目、フランス原産の大型肉牛、赤肉の比率が高い)などなじみ深いものがあります。最近では国産牛の評価は全く地に落ちてしまいましたが、全

国の和牛の9割を占め、霜降り肉で名高い黒毛和種は明治末期に日本在来の見島牛を各種の輸入種と掛け合わせて改良したものです。

4. 牛石・牛岩

基本的には牛の形に似た石を「牛石」とか「牛岩」と名付けたものです。いろいろいわれ因縁があったり効用があるなどといひ伝えられています。転石であったり、人工的なものであったり、出典が孫引きだったりするので岩質その他の地質学的な状況は不明なものが多いのですが、次に各地の「牛石」の話題をいくつか紹介しましょう。

牛にまつわる諺としては「牛こしわがに引かれて善光寺参り」が有名です。

中新世中期から、現在の群馬県～長野県境に位置する谷川岳から南東の諏訪湖付近にかけて帯状の地域が隆起しはじめ、やがて陸化しました(これを中央隆起帯と称しています)。これによって太平洋と日本海の海域の連続が断たれてしまい今日にいたっています。さて、鮮新世にはこの隆起帯に湖沼性の堆積盆地が生じ小諸層群と呼ばれる陸成層が堆積しました。また、この時期には火山活動も盛んだったので、それらの噴出物は凝灰角礫岩や凝灰岩としてまた削剥されて礫岩として堆積盆地に供給されました。小諸層群は下位から梨平累層、大杭累層、布引累層及び瓜生坂累層に区分されます。以前紹介した「雷電の力石」である安山岩は、小諸層群の堆積後、それを基盤とした第四紀の烏帽子火山群の活動の産物で時代が異なります。この火山は長野県上田市と浅間山のほぼ中間に位置するカルデラを持つ成層火山です(加藤・遠藤, 2001参照)。

さて、小諸層群の地層が分布しているJR小諸駅から西へバスで行き、大久保下車、谷あいの参道を登ること20分の位置に長野県内屈指の霊場である釈尊寺、俗称「布引観音」があります。奈良時代に各地を廻って仏教の普及や庶民の救済に努め、745年にはわが国最初の大僧正の位を受けた名僧行基の開山になる天台宗の古寺です。本尊である阿彌陀如来像(伝行基作)を本堂に安置し、聖徳太子作という聖観音像が布引観音堂にあります。こ



写真3 牛岩(長野県)。布引層の凝灰角礫岩の露頭の表面に牛の形が見えるというが？

の観音堂は、本堂の西側に、断崖にぴったり張りつくように造られ、桁行五間、梁間五間半、入母屋破風造、銅板葺き、朱塗りで、外陣は20m以上もの8本の長い柱に支えられた舞台造りで、京都の清水寺の懸崖造りとはいきませんが、一見の価値がある立派なものです。鎌倉時代の代表的建築として国指定の重要文化財となっています。

前置きが長くなりましたが、ある地層の代表的な分布地を模式地と呼びます。布引観音に至る参道沿いの崖の露頭が布引層の模式地です。時代は今から3～400万年位前のもので、厚さは約150mほどあります。ゴツゴツした角礫を含む黒っぽい岩層が凝灰角礫岩、白色～灰色っぽい厚さ数10cm程度の地層が凝灰岩や火山性の砂層です。これらが繰り返して出てきます。付近一帯は風化浸食によって急峻な奇岩・地形を呈しています。

この参道沿いに観光地点を示す立札の掲示があり、その中に「馬岩」と称する部分があります。これはあとで紹介します。その先に「牛岩」という掲示



写真4 布引観音境内にある人工の臥牛石。

があります。「牛に引かれて善光寺参り」の伝説発祥の地にふさわしく、岩に牛の姿が現れており、この布引溪谷の中でも迫力ある奇岩である・・・と書いてあります。これは露頭表面の色調の違いから牛の形にみえたようですが、現在では風化が進みほとんど何が何だかわかりません(写真3)。この伝説というのは次のようなものです。

昔、山麓に因業で無信心の老婆が住んでいたそうです。この老婆がある日千曲川で白布をさらしていたところ、一頭の大きな黒牛が現れ、布を角に引っ掛けて走り去っていきました。牛を追いかけてついに善光寺まで行った老婆は、如来の光明を拝して信仰に生きることになったといひます。牛は元の道を引帰して消えましたが、これが聖観音の化身というわけです(善光寺如来だという説もあります)。昔は、善光寺土産の「善光寺縁起」の一枚もの錦絵のモチーフとして有名でした。白い布と黒い牛というツートーンカラーの配置もなかなか考えられたものです。

信仰心を奨励するための作り話の類であれこれ云々するのは野暮ですが、それを承知であえて言えば、布引観音から善光寺まで街道沿いに約45～50kmもあり、つまりフルマラソンにも等しいあるいはそれ以上の距離なのです。いくら執念深く我欲が強く(著者の妻のことでは断じてありません)、休み休み行くといっても老婆が牛を追いながら行ける距離ではありません。どうしてこんな話が作られたか今となっては定かではありませんが、世の中色々研究している人がいるものです。例えば、「牛」というのは「御師おし」の訛なまりであるとする説があります



写真5 錦天満宮境内のブロンズ製の臥牛像(京都)。



写真6 パンティヤイ・スレイ(カンボジア)にある聖牛ナンディンの臥牛石。

(五来, 1988)。本来は善光寺講の一団を引き連れて善光寺詣りをする先達を「御師」と呼んでいたもので、この時先達が一本の白い布の綱(善の綱)を持って信者の列を引っ張っている事例があるといわれています。これが後世になって牛に戯画化されたのではないかというのです。

本殿横に置かれてある「臥牛石」はありふれた黒雲母花崗岩製でどこの産地の石か特定できませんが、布引山一帯には分布しませんので、大方、石材屋が持ち込んだものでしょう。後ろ向きに座った形です(写真4)。

別の言い伝えでは、老婆を善光寺に導いた牛が井戸の中に入って石に化したものとされる「臥牛石」が長野市にあります。こうした「臥牛石」は枚挙に暇ないほど各地にあります。平安貴族の乗用としての連想や菅原道真が牛車を引く牛をかわいがったという伝承から天満天神の使わしめとして、諸病平癒や商売繁盛を社前の「臥牛石」に祈願し、痛い所ばかりでなく強くしたい所を撫でると良いとする「撫牛信仰」などの風習も生まれたのです。東京都江東区の亀戸天満宮では撫牛の頭部に絵馬を掛けて学業成就や試験合格を祈る人が多いのもこれによります。もちろん石製だけでなく、ブロンズ製のものは撫でられた部分がピカピカに光っています(写真5)。このほか大日如来が臥牛の背に乗っている石像(仏)は「牛乗り大日」とも称され、千葉県北部などで多く見られます(芦田, 1999)。

もちろん外国でも岩塊を彫刻した「臥牛石」は多々あります。例えば、先アリア時代の豊穰の神に由来し、創造者と破壊者の両方の性格を有する

シヴァ神が乗る聖牛(神牛)である白い雄牛ナンディン(ナンディ)は男性の力の象徴でもあります。カンボジアのアンコール遺跡群の中でも細粒緻密な薄紅色の砂岩を彫刻し格調高い美しさで知られるパンティヤイ・スレイ(Banteay Srei, 「女の砦」の意)は、967年創建のヒンドゥー教寺院です。アンコール・ワットの北東約30kmに位置し、行くには悪路の連続を覚悟しなければなりませんが一見する価値があります。ここの東内門と中心境内の内門の間に写真6のような首から背中部分が欠落した臥牛石像と台座があります。これがナンディンの像です。白い牛の像なのに黒色の砂岩からできています。誰が壊したのかわかりませんが罰当たりなことです。アンコール・トム遺跡の南方にあるチャウ・サイ・テウダ遺跡は12世紀前半の建造ですが、この正面右側にあるナンディンの石像は比較的良く全身が保存されています。

愛知県岡崎市にある東海石材の石切場は「岡崎石」の中でも最上級石材である「青石」と称される細粒黒雲母花崗岩を産します。この付近を地元では「牛岩」と呼んでいます。これは昔大きな黒牛のような石があったからだそうです(床子, 1978)。

一頭だけの牛ではなく牛の群れを表したものもあります。多摩川中流の多摩大橋～八高線多摩川橋梁間の河原(立川駅北口より立川バス拝島営業所行き、拝島駅行き13分、谷下下車、徒歩10分)では高さ1mほどの牛の群れが泳いでいるかのような数多くの痩せ尾根状の浸食地形があり、「牛群地形」と称されています。新第三紀の海成の粘土を挟んだ砂層が走向方向に浸食されてできたものでしょう。

5. 牛の石化伝説

牛が石に化したという石化伝説の類は各地にあります(一部は加藤・遠藤, 1999より)。

福島県伊達郡のある寺の門前には寺を造営する時木材を運んだ牛が化したものだという「牛岩」があるそうです。牛も色々な物を運ばされて、あげくの果てに石になってしまうのではたいへんです。

有名な会津若松のおみやげの1つである張子の「赤ベコ」には次の謂われがあります。大同二(807)年に徳一大師が会津若松西方の柳津に虚空蔵堂を建立したとき、黙々と資材を運搬していた一頭の赤牛が、完成した夜に忽然と石に変わって永遠に御仏にお仕えすることを願ったというのです。これを聞いた藩主の蒲生氏郷が京から職人を呼んで作らせたのが「赤ベコ」だそうです。

長野県小県郡武石村沖区鳥羽にあるという「牛岩」は、言い伝えによると、長さ四尺五寸、高さ二尺四寸、厚さ一尺六寸の大岩で、その形状が臥した牛に似ていることから命名されました。昔、牛に乗ってここにやって来た神様が笹を焼いて田圃を開いたので、村人は笹焼明神と崇め、後にその牛が死んで石になったものだと思います。道の真ん中にあったのでみな避けて通っていたのですが、ある時尾部にあたる部分を欠いたら白い液が流れ出し、以来流行病は下流側にのみ広がり、上流側には伝染しなかったといいます。この道が県道となってからは、牛石は東側に移され土用の丑の日に祀られているそうです。このあたりは中新世の海底火山の噴出物からなるいわゆるグリーンタフ(緑色凝灰岩)の分布地ですが、この岩が火山岩なのかその中に貫入してきたものなのかは不明です。

同じく、長野県小県郡川西村室賀から更級郡六ヶ郷に抜ける道の峠にあったという「牛石」も形が牛に似た石で、昔、水澤大権現が乗ってきた牛が石になったと言いつたされています。この「牛石」が田圃の作物を荒らすことがあり、その鼻の部分に縄を通してつないだことがあるといいます。付近の地質からみると、新第三紀中新世の泥岩に貫入したひん岩の岩脈が浸食に抗して残った岩塊ではないかと思われます。

さらに、長野県東筑摩郡のは、その昔、中国から大般若経を背負ってきた牛が倒れ石に化したもの

で、以前はこの「牛石」の上に地藏様が祀られてあったといいますが、今では詳しいことはわかりません。

群馬県佐波郡の「牛石」は、義経伝説にからむもので、義経が東下りの時乗ってきた牛が死んで石と化したものだと思います。

単に姿形が似ているだけでなく雨乞いに関して御利益のある「牛岩(石)」もあります(いずれも又聞きで真偽の程は明らかではありません)。

愛知県額田郡のは、山奥の滝にある雨乞いに関連する巨岩で、早魃の時にこの滝壺の水を汲み出し、「牛岩」に鼻綱を通して滝の両側にある大きな松の木に結び、「牛岩」の背を洗って祈ると大雨が降るといいます。

佐賀県西松浦郡にある「牛石」は、酒で洗うと雨が降るといいます。神戸牛はビールをかけて育てるといいますが。

この他、静岡県磐田郡(旧)敷地村牛ヶ鼻にある十間×五間の大きさで牛の寝姿に似た「牛岩」は、岩の面に「世をうしのはな見車に法のみち ひかれてここに廻りにけり」という歌が刻んであるといい、これは空海が空中に座して筆を投げたらこの書ができたと言いつたといわれています。

大阪府交野市倉治には織女姫を祀る機物神社があり、近くの香里団地内の中山観音寺跡に牽牛星と伝えられる巨石があり、「牛石」とも呼ばれているそうです。

奈良県大台ヶ原高原にある臥牛状の岩塊は、里人に仇なす魔物を封じ込めたという伝説があるそうです。

6. 牛に因む石

次に牛そのものよりも牛に因む石を紹介しましょう。いわゆる「牛繋ぎ石」です。何の石でも牛を繋ぐのに使えば、「牛繋ぎ石」ですと言ってしまうまでもありますが、千国街道は、長野県北部から姫川沿いに新潟県糸魚川に通じる南北の交易路でしたが、別名「塩の道」として有名です。その白馬付近に内陸部の信州に日本海側から塩を運んだ牛を繋いでいたという岩があり「牛繋ぎ石」と称されています。これは、第三紀中新世の海底火山の噴出物である火山角礫岩や凝灰岩の岩塊です。いわゆる



写真7
長野県松本市
本町通りにあ
る牛繋ぎ石。

「グリーンタフ」です。この他県内各地にあり、例えば松本市内本町通りの中ほどにもしめ飾りをかけられた「牛繋ぎ石」が保存されています(写真7)。

ちょっと変わった所では「牛黄ごおう」があります。これは牛の肝臓や胆嚢たんのうに病的にできた石で、漢方薬として使われています。古代中国では、「牛黄」は

種々の災害よけとして信じられてきました。日本では、牛黄を墨や朱に搦り混ぜると呪力が生じるとされ、それらを用いた印、文字や絵などを描いた紙は「牛玉(王)宝印」と称されました。

さて、今回は馬を中心とした話に移りましょう。

参 考 文 献

芦田正二郎(1999):動物信仰事典, 262p.
 藤沢周平(1992):秘太刀馬の骨, 294p. 文藝春秋.
 五来 重(1988):善光寺まいり, 331p. 平凡社.
 五十嵐謙吉(1998):十二支の動物たち, 八坂書房, 227p.
 加藤碩一・遠藤祐二(1999):石の俗称辞典 -面白い雲根志の世界-, 312p. 愛智出版.
 加藤碩一・遠藤祐二(2001):力石, 地質ニュース, no.561, 63-68.
 岡田恵美子・奥西峻介訳註(1999):ペルシャ民俗誌, 東洋文庫 647.337p. 平凡社.
 斎藤建夫編(1979):ふるさとの文化遺産, 郷土資料事典47 沖縄県, 95-96. 人文社.
 斎藤建夫編(1997):ふるさとの文化遺産, 郷土資料事典20 長野県, 255p. 人文社.
 田中優子(2000):江戸百夢, 167p. 朝日新聞社.
 床子士郎編(1978):愛知県地学のガイド, 256p. コロナ社.

KATO Hirokazu and ENDO Yuji (2001): Stones named after cattle and horse (part 1).

<受付:2001年12月19日>